

東京の、赤坂への道に紀國坂といふ坂道がある——これは紀伊の國の坂といふ意味である。何故それが紀伊の國の坂と呼ばれて居るのか、それは私の知らない事である。この坂の一方の側には昔からの深い極はめて廣い濠ぼりがあつて、それに添つて高い縁の堤が高く立ち、その上が陸地になつて居る、——道の他の側には皇居の長い宏大な塀が長くつづいて居る。街燈、人力車の時代以前にあつては、その邊は夜暗くなると非常に寂しかった。ためにおそく通る徒步者は、日没後に、ひとりでこの紀國坂を登るよりは、むしろ幾哩も廻り道をしたものである。

これは皆、その邊をよく歩いた貉のためである。

貉を見た最後の人は、約三十年前に死んだ京橋方面の年とつた商人であつた。當人の語つた話といふのはかうである、——

この商人が或る晩おそく紀國坂を急いで登つて行くと、只ひとり濠ぼりの縁ふちに踞かかんで、ひどく泣いて居る女を見た。身を投げるのではないかと心配して、商人は足をとどめ、自分の力に及ぶだけの助力、若しくは慰藉を與へようとした。女は華奢な上品な人らしく、服装せうりも綺麗であつたし、

それから髪は良家の若い娘のそののやうに結ばれて居た。——『お女中』と商人は女に近寄つて聲をかけた——『お女中、そんなにお泣きなさるな!……何が困りなのか、私に仰しやい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助け申しませう』(實際、男は自分の云つた通りの事をする積りであつた。何となれば、此人は非常に深切な男であつたから。)しかし女は泣き續けて居た——その長い一方の袖を以て商人に顔を隠して。『お女中』と出来る限りやさしく商人は再び云つた——『どうぞ、どうぞ、私の言葉を聽いて下さい!……此處は夜若い御婦人などの居るべき場處ではありません! 御頼み申すから、お泣きなさるな!——どうしたら少しでも、お助けをする事が出来るのか、それを云つて下さい!』徐ろに女は起ち上つたが、商人には背中を向けて居た。そして其袖のうしろで呻き咽びつづけて居た。商人はその手を軽く女の肩の上に置いて説き立てた——『お女中!——お女中!——お女中! 私のお言葉を聞きなさい。只一寸でいいから!……お女中!——お女中!』……するとそのお女中なるものは向きかへつた。そして其袖を下に落し、手で自分の顔を撫でた——見ると目も鼻も口もない——きやつと聲をあげて商人は逃げ出した。

一目散に紀國坂を駆け登つた。自分の前はすべて眞暗で何も空虚であつた。振り返つて見る勇氣もなくて、ただひた走りに走りつづけた擧句、やうやう遙か遠くに、螢火の光つて居るやうに見える提燈を見つけて、其方に向つて行つた。それは道側(みちがた)に屋臺を下して居た賣り歩く蕎麥屋の提燈に過ぎない事が解つた。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、以上のやうな

事に遇つた後には、結構であつた。商人は蕎麥賣りの足下に身を投げ倒して聲をあげた『あゝ！—あゝ!!—あゝ!!!』……

『これ！ これ！』と蕎麥屋はあらあらしく叫んだ『これ、どうしたんだ？ 誰れかにやられたのか？』

『否、—誰れにもやられたのではない』と相手は息を切らしながら云つた——『ただ……あゝ！—あゝ！』……

『—只おどかさされたのか？』と蕎麥賣りはすげなく問うた『盗賊にか？』

『盗賊ではない——盗賊ではない』とおぢけた男は喘ぎながら云つた『私は見たのだ……女を見たのだ——濠の縁で——その女が私に見せたのだ……あゝ！ 何を見せたつて、そりや云へない』……

『へえ！ その見せたものはこんなものだつたか？』と蕎麥屋は自分の顔を撫でながら云つた——それと共に、蕎麥賣りの顔は卵のやうになつた……そして同時に燈火は消えてしまつた。

(戸川明三譯)

*Mayina*, (*Kwaidan*.)